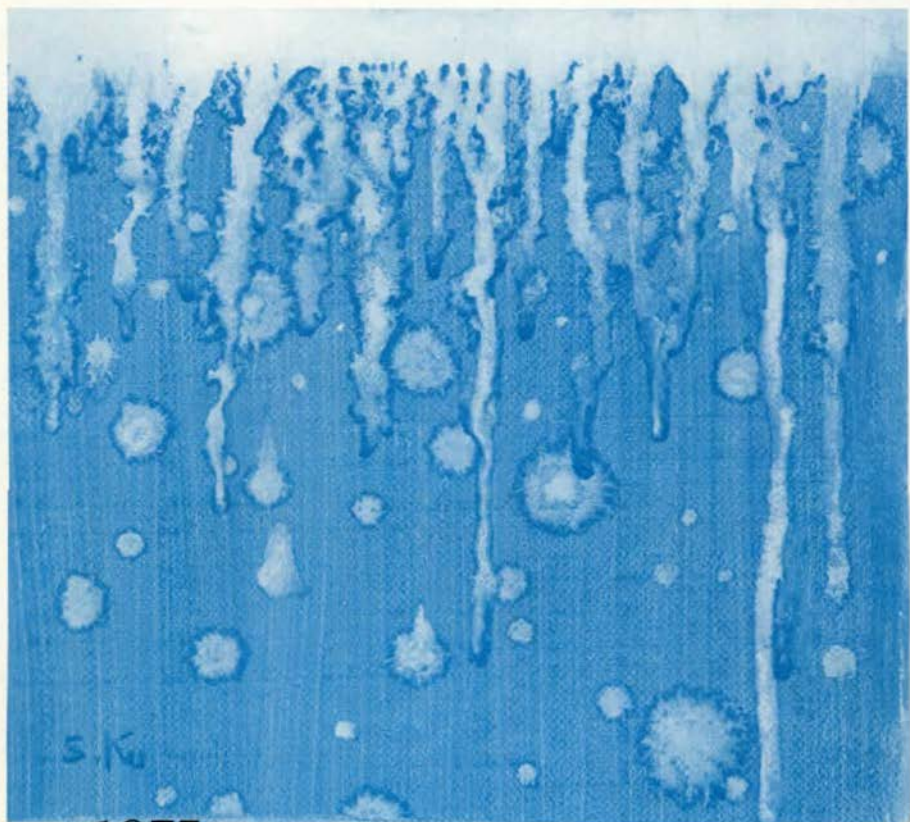


土 淨

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別投承認雜誌)第三二五号
昭和五十年五月二十五日印刷 昭和五十年六月一日発行
第四十一卷 第六号



1975

6



無垢

善光寺上人 智光



無 垢

信州善光寺尼公上人

一条 智光 台下

垢とは、煩惱の異名で、心を穢す垢の意味である。煩惱のないのを無垢という。それは、けがれない心である。「生れたまま」ということもできよう。涅槃經に、有名な「一切衆生悉有仏性」と説かれているが、人間、いなすべての生命あるものは、仏性がやどっているという。しかし、悲しいかな、仏性の光は煩惱の黒雲におおわれ、仏種やどせども、煩惱のけがれを洗いおとす力も、自らにはない。ただひたすら、阿弥陀さまのみに信順するよりいたしかたがない。

無垢とは、ただ単にけがれなきすがたをいうのではない。泥中に清楚に咲く蓮花の喻のように「煩惱無尽の凡夫」と自らを深く洞察するとともに、み仏の力をすなおに信ずる心をいうのであろう。

六 月 号



目

次

無垢	一条智光
現代人のモラルを考える⑤ 憎しみ	竹田暢典・魚尾晃久…(2)
特集 生活の中に生きている仏教	…(8)
——一心不乱・分別・瑠璃・覚悟・奈落 果報・有無・執著・流転・意識——	
ご法語に聞く 法然上人の人と生活⑥	
「ただ人にはおはせざりけり」	宝田正道…(8)
吹米宗教見聞録⑤ 開教使<下>	安居香山…(28)
書の四季③ 法然上人の御書	林錦洞…(28)
心の履歴書④	川内知光…(31)
読者のたより ハガキでひと言	…(36)
念仏ひじり三国志⑭ 法然上人をめぐる人々	寺内大吉…(38)

表紙 久住静雄画

カッパ 大正大学美術部

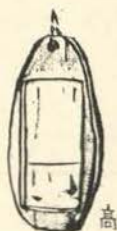
憎しみ

Ⅱ 現代のモラルを考える Ⅱ

Ⅴ 第五回 Ⅴ

竹 田 暢 典

(大正大学助教授)



「物で榮えて心で亡ぶ」というのが現代の特徵の様相だといふ。また精神的荒廢がその極に達しており、いわゆる「シラケ時代」、それが現代だともいふ。精神的貧困、不安動搖の念が日と共に増大し、人間関係はいよいよ複雑化し、その行動の場は次第に分極化しつつある。世界は狭小化の一途をたどり、各種の社会問題が多発化している。老人関係諸問題、青少年非行、交通戦争、公害問題、テロリズムと、その事例は枚挙にいとまがない。

このような現代社会においては、いったいどのようなモラルの確立が要請されるのであろうか。その前に、どのようなモラルが欠けているのであろうか。確かに、対立感情は極め

て増大しつつある。例えば、家庭内にあっては親子の断絶が嘆かれてゐる。社会的には階級対立が問題となる。イデオロギーの相剋もある。世界的には民族間、国家間の対立が問題となっている。反体制運動も各地で盛んに進められ、テロも頻発している。実際、対立激化の傾向は否みがたい事実と思われる。

それでは、これは憎しみ、憎悪の感情にまで発展しているのであろうか。もちろんこの地球上に三十数億の人間が生存している以上、一部にそうしたものが無いとはいへまい。しかし全体的にそういう憎しみの念が充満しつつあるとも思われない。あるいはこれは憎悪の感情よりもっと始末に悪いものかもしれない。不正に対する憎しみ、悪に対する怒りの念

を、一般の現代人は明確には表明しないのかもしれない。文字どおりシラケているのであろうか。無感覚になっているのであろうか。ここにおいて、不動明王などに見られる忿怒形、怒りの形相のすさまじさの意味についても、もっと深く考えてみるべきではなからうか。つまりもっと憎み、もっと怒るべき明確な対象を適確に認識することの意義が、より一層強調されるべきではなからうか。

しかしまた反面、人間相互の本質的憎悪感が、もし極めて増大しつつあるというのでないならば、やはりそこに一縷の望み、救いの期待を見いだし、活路を開いてゆくべきではなからうか。すなわち家庭の平和と安定の創造、社会における階級、階層の対立の止揚、イデオロギーの相違の超克、民族間、国家間の闘争の終熄などの方途が、一日も速やかに確立されなければならぬ。内戦たると対外戦争たるとを問わず、戦争根絶の具体的プログラムが、グローバルな視点から考えられなければならない。

それでは、そのための必須不可欠の条件は何であらうか。思うに、多くの社会問題発生の因由が人間の心に存する以上、よしそれが一見どんなに迂遠に見えようとも、心の問題に治療のメスをあてなければ、根治には至るまい。確かに、道は遠い。理想の実現は遙かなあたにあるのかもしれない。

い。しかしそれでもその実現に渾身の努力を傾けよう、という意志こそ大切なのではなからうか。

そしてその際における人間の態度の具体的なありかたは、当然、権利の主張を第一とすることではなく、まず義務の遂行、奉仕的实践でなければならぬ。目的に至るべき手段そのものにおいても、闘争性の排除がなければならない。こうして仏教のいわゆる布施の倫理の確立と堅持こそ根本的条件となるのではなからうか。もしほうつておけば、あるいは憎悪にまで至るかもしれない対立感情の克服は、人間それぞれの内省懺悔と、それに支えられる恩徳報謝の心情の涵養、布施行の実践によるのでなければならない。換言すれば、その基本的性情として、人間相互のゆるし、慈悲、憐愍、共感同苦の感情が、世界すべての国々で更に強力に育成されなければならないまいと思われる。そしてそこにこそみ仏の廣大無辺な恩徳、大慈悲の力用が顕現されるのではなからうか。

もちろんそれは一朝一夕に成就され得べきことではない。人間世界の基本的な苦、つまりいわずの八苦の一つに怨憎会苦の存する意味の重さも、充分にかみしめなければならぬ。ともすれば人間の心は偏頗なはたらきをしがちである。偏見、先入観にとらわれ、嫉妬心もまた起る。「外面如菩薩内心如夜叉」という表現も、否みがたい心理の一面を充分に

もっている。しかしさればこそ、内省懺悔、共感同苦、恩徳報謝の心情、倫理が強く要請されるのではなからうか。

伝教大師は青年期の述作たる「願文」に「愚が中の極愚、狂が中の極狂、底下の最澄」と、御自身に対する痛切な内省の念を表明されている。そしてこれは生涯を貫く大師の基本的な姿勢でもあった。親鸞聖人もまたこの系列につらなる方であり、「愚禿」の自覚はまことに強烈であつた。古くは聖徳太子の述作という「十七条憲法」は、是非の対立、論争を戒めて、「共に是れ凡夫のみ」という内省、自戒を求める発言のあることも忘れてはならない。今は二、三の例示にとどめるが、仏教がこのような内省——それは憎しみの感情の正反対に位置すべきゆるしの心情の基底となるものであるが——を人間必須のものとしてきた重大な事実が、あらためて想起される。

こうして培われるゆるしの心情の絶対化が仏徳の顕現となると思われる。「阿弥陀経」には、極楽には三悪道がなく、またその名称さえもないとあるが、それは極楽の基本的特質であると同時に、教主阿弥陀仏の仏徳の絶対性の表現でもある。ここに至れば、「南無阿弥陀仏」という絶対憑依の宗教感情の表明は、我他彼此の対立を超え、憎悪の感情の根絶を志向する宗教的誓願につらなるものとなる。そしてそれが阿

弥陀仏の本願、誓願という角度からすれば、「大無量寿経」に示されている四十八願ともなるのではなからうか。

ここにおいて、具体的な人間関係のありかたに思いを至すとき、その称讃すべき極致の一例を親鸞聖人の法然上人に対する傾倒ぶりに見いだし得ると思われる。すなわち「歎異抄」には、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の仔細なきなり。念仏はまことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてても存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と明言されている。「偏依法然」とも称すべき、その師法然上人の人格と思想、信仰に対する親鸞聖人の絶対傾倒の態度が明確に知られるのである。

思うに、悪を怒り、不正を憎む倫理的感覚の培養は、現代および将来において最も大切なモラルとして要請されるであろう。しかしそれは更に高次な場において、特に人間の具体的な行為の実践を通じて、善悪の二元対立を超越するものに昇華されなければならぬ。つまり最も高度な宗教倫理こそ人間世界において要請される最高のモラルとなるのではなからうか。一般的に評すれば、これは倫理のカテゴリーを超え

ているといつてもよいであらう。しかもなお、人間の世界、現代のモラルのありかたについて考察を深めてゆけば、結局、ここに帰着するのではなからうか。

最後に、このような志向の具体的ないとなみの一例を示せば、国際赤十字の存在がある。赤十字は、怨親平等の基本思想に立脚する団体として、政治や体制からの中立性を堅持しつつその活動を推進しており、創立以後の歴史はすでに百年



憎しみの解消

を超えている。そこには決して没却し得ない人間の努力の表明がある。また幼児期からの宗教情操教育は、各地で徐々にその成果を収めつつある。排他性を除去する国際的センスの養成も、幼児教育における重要な課題となっている。なるほど、道は遠い。しかし人類史の明るい展望は開かれている。大慈大悲の仏心の妙用は、やがてそこに確固たる具体化の道を開くであらう。

魚尾晃久

(静岡県三島市願成寺住職)

「憎しみ」という感情のうらには、しかえしが潜んでいます。何らかの形で、いつか報復をしないと気がすまない、というのが今に至るまで変らない人間の心理です。「目には目を、歯には歯を」という有名な文句は、旧約聖書に出ています。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」というのも同じ気持ちです。その通り、憎しみに対する報復は、色々な事件になって

歴史上に現われています。家庭での生活の憎いものの第一は継子で、継子いぢめ物語は多くの文学に見られます。姑にとって嫁も憎いものの一つです。これは、血縁がない他人行儀が原因です。大きな事件としては赤穂浪士の仇討があります。これをしないと、武士という階級の名分が立たないのです。長い伝統に培われた人間共通のモラルです。こうした大

小の憎しみを人々が忘れたなら、世の中はどれほど平穩になることでしょうか。

先日、東京都知事選挙で、それぞれ「明るい革新都政をつくる会」(みのべ)、「正しい都政をきずく会」(松下)、「新しい東京をつくる都民の会」(石原)との確認団体の標榜するところには、明るくない、正しくない、新しくない、という憎しみに連らなつたものが汲みとられます。「憎い」というのは、心になわなない、氣にいらぬ状態ですから、選挙などの時には、それをドギツイ表現で人に訴えようとしています。

でも、憎しみの感情の解消は、時によっては時間が解決してくれることがあります。憎しみが時とともに薄らいで忘れてしまふからです。しかし、根本的には、それを待っているわけにはいきません。宗教の力を期待します。憎しみ、怨みについて、法句經に「怨みは怨みによってけつして静まるものではない。怨みは怨みなくして静まる」と。何らかの方法で、憎しみ、怨みを解消させようとしています。それは、高い次元からの思考形式を握ることです。東洋には多くの名言があります。論語には「徳を以て怨みに報いる」と。自覚と勇氣とが必要です。善導大師は「慈心を以て相向い仏眼を以て相看る」と教え、聖徳太子の憲法には「人はなほだ悪しは鮮し。よく教えうれば従う。それ三宝によらざれば、何を以て

てか狂^まがれるを直せん」と。総じて「忍辱^{にんじやく}」、耐え忍ぶことです。ブツダの心の発露です。

だが、こうした名言も、現代の世相には少しく観念的であるかも知れません。お上品で高度すぎて、わかつたようなわからないような氣持を否定出来ないのではないのでしょうか。というのは、憎しみのもつ領域の問題が、現代では戦争とか公害とかいう個人の立場を離れた社会性から考えられなくてはならなくなつたからです。戦争未亡人はうつろな人生に生き、何にしろ生れてきたかわからない苦惱に打ちひしがれ、原爆の後遺症はなお今患者をして憎しみの情に駆り立てています。大企業の公害汚染では、破滅と滅亡へと落とされた人々の憎悪がある現実を忘れることは出来ません。前述の忍辱^{にんじやく}つまり耐え忍ぶという六波羅蜜の一つの教訓も限度がある、といわれても、どういう返事が出来るでしょうか。戦争によつて生産企業は驚くべき利益を得、公害をふりまくだけでなく独占資本に物をいわせて、庶民の苦衷を察することなく、ますます肥ってゆく企業への憎悪は、なまやさしい一端の教義では解決され得ない段階に来ているようです。やたらに寛容の美德を押しつけ、我慢辛抱して人を怨まない教訓の効果が、どれほど社会的な憎悪を霧散させてくれているのでしょうか。もはや現代では、前時代的な美言麗句では納得し

ない多くの犯罪と連がる憎悪への原因が大きすぎます。憎しみの感情は大きく深く、幾千、幾万の人々の課題になってしまっています。だから、社会性をもって問題への寄与がないならば、ブツダの教えの光は薄れてきます。ここで思い出されるのは、かつての妹尾義郎氏の新興仏教の気概です。ブツダを背負って街頭へ、の実践運動です。林靈法百山法主もその時の同志の一人として、今に私たちに良心的抵抗の方法を示唆して下さっています。にもかかわらず、体制的に、戦争や公害の問題ととり組んでいる宗派がいくつあることでしょうか。そんな宗是をもった宗派が次から次に生れて出てくるものが渴望されてなりません。ブツダはそれを実動せよと教え残されていることです。法句経に、

あなたはこれを実践して苦悩を滅せよ。矢をとり除くことを知ったうえで、わたしによって一つの道がまさに説かれる、

と。実行力のないことが宗門人、仏教者の欠点であってはなりません。矢にあたったならば、とにかくその矢を抜きとることです。有名なこの比喻は、矢を射た者はだれか、どんな種類である等の詮索よりも、先ず矢をとり除くことをしなければその人は死んでしまいます。

なおすべきことは、これをなせ、断固としてこれを行な

え。ゆるみがある出家者は、いよいよ汚塵をまき散らす。これも法句経の教えです。ブツダは実践者でした。理論はその体験から生れたものでした。えて宗門人、仏教者の会合には、立派な提案が行われ、双手を挙げて可決され、宣言文までつくられても、それだけで終わってしまうことが少なくありません。自己満足の遊びであってはならない、と思います。社会的憎悪を扶摘する方法とはなりえないのであります。

どうして、公害なら公害に、真剣にとり組むことが出来ないのか。それをしようとしなののか。なぜ、憎悪の絶滅にブツダの教えをぶっつけて行かないのか。徹底的な事なかれ主義に甘んじて生きているか死んでいるのかわからない毎日に終始しているのか。解答は簡単です。違憲すれすれの財政的権力と絶縁出来ないからです。変革への道の実践が自からを不利にするからです。支配する力は、現段階では財政力です。弾圧は、政治的なもの、思想的なものよりも、お金の力でやってきます。大商社がそれを示してくれています。いやな喻えですが、長いものには巻かれる体制からの脱出が恐ろしいのです。人道主義から出発した変革への道を、ブツダと共に求めるところにこそ、社会的憎悪の解決がなされることを、銘記したいものです。



一 心 不 乱

もし私がいままで一心不乱に勉強に打ち込んでいれば、もう少し勉強ができていたかもしれないのと思うことがあ
る。しかし、私も最近の学生たちと同様「ながら族」の方
あり、「一心不乱」について書くようにいわれ、いまこうし
て書いているのであるが、非常に書きづらい思いをしてい

生活の中に生きている仏教

る。実際、「一心不乱」について調べるにしても、決して一
心不乱に調べたのではなく、やはり「ながら族」であった。
「一心不乱」は文字からその意味が明らかのように「他の
ことに心を乱すことなく一つのことに心を注ぐこと」であ
る。そして、一般にはこれ以上に深い意味を持って「一心不
乱」の言葉が使われることはないが、仏教特に浄土宗におい
ては、もっと深い意味を持っている。

クマールジューヴァ（鳩摩羅什）という高僧が訳出した『阿
弥陀經』に、

「もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、
名号を執持するに、もしは一日八中略しもしは七日、一心
不乱なれば、その人命終の時に臨んで、阿弥陀仏はもろも

ろの聖衆とともに、現にその前に在したもう。」

という箇所がある。宗祖法然上人は、ここにいう「一心不乱」を解釈して、

「一心不乱とは念仏を修する時、心散乱せず、至誠信心専らに仏名を念ず。これ即ち往生の修因なり。」

と仰せられた。つまり、ここでいう「一心不乱」は何に對して一心不乱であるかといえは、阿彌陀仏を念すること、即ち「南無阿彌陀仏」と称えることに對して一心不乱なのであり、凡夫が往生するためには、これを修すべきであるとお説きになっておられるのである。

『一枚起請文』にもあるように、我々は宗祖法然上人のお言葉にしたがつて、一心不乱に、ただ一向に念仏すべきなのである。

(中村隆敏)

分 別

「分別(ぶんべつ)」とは、ものごとの道理に通じたわきまえ(思慮)の意味であり、また、その道理を考えわけること(判断)の意味である。「分別顔」(分別のあるような顔つき)、「分別ざかり」(ものごとの道理のよくわかる年令)などといくつかの派生語もよく使われている。

分別は、仏教用語としては、おおむねサンスクリットのヴィカルパ(vikalpa)の漢訳語であるが、その概念はきわめて重要である。離れるとか分れるという意味の接頭語ヴィ(vi-)と、適するとか一致するという意味の動詞クリブ(kṛi)が結び付いた動詞ヴィクリブ(vi-kṛi)は、変化する、決定する、区別するなどという意味である。だから、このヴィクリブの名詞形ヴィカルパは、もともとの原義は区別すること、見分けることなどであったが、転じて仏教の基本的な教義概念として、推量し思ひはかること、あるいは、わきまえ、判断などの意義を持つようになった。その意味で、漢訳語の分別とはまさにサンスクリットの原意に忠実な訳語であるといえよう。

すでは『俱舍論』卷二では、自性分別(直接に認識するはたらき)、計度分別(推量判断するはたらき)、隨念分別(記憶するはたらき)の三分別に分類しているが、この分別の語を詳しく検討し厳密な概念設定をほどこしたのは大乗唯識仏

教である。すなわち、凡夫衆生の分別はいずれも迷妄執着によるものであり、どうしても真理を悟ることはできない、いわば凡夫衆生の分別の知恵は有分別智と呼ばれるものであり、この有分別智を離れた菩薩の平等知見による無分別智こそ真理への到達がある、という理念である。ここに、凡夫衆生の分別とは虚妄分別、つまりは妄想、誤まった認識として、まったく排斥されなければならないものとなる。

ところで、「分別」と記した場合、辞書には「ぶんべつ」と読む別の一項がある。種類によって分配すること、区別することなどの意味であるが、サンスクリットにも、ヴィバンガ(vibhanga)とかヴィバジュヤ(vibhajya)などという用語があり、同じく分別と漢訳されて、分析とか配分、類別を意味する用例があるということも付け加えておこう。(原裕)

瑠

璃

宝石の「瑠璃」は仏教に由来する言葉である。俗に言うキ

ヤツ・アイ、すなわち猫眼石である。サンスクリットの原語はヴァイドゥールヤであるため、昆瑠璃、吠瑠璃と漢訳されることもあるが、ヴァイの部分が取れて琉璃のほうが一般的になった。

浄土三部聖典の一つ、『阿弥陀経』には、

「金・銀・瑠璃・頗梨・車渠・赤珠・碼瑠」

とあり、七つの高貴な宝が説かれている。このうち頗梨は水晶、車渠はサンゴ、赤珠は赤い真珠である。

なお、聖典に説かれる七宝の中にダイヤモンド(金剛)サファイヤを加えなかったことが注目されている。

さて、この琉璃は大の大乘経典の一つ、『薬師経』に説かれている。この『薬師経』は、『阿弥陀経』の構成を換骨脱胎したものとみられており、西方に位置する阿弥陀如来に対して、東方に薬師瑠璃光如来がいることを説く経典である。そのために、東方世界は大地が瑠璃に輝き、建物は七宝で飾られ、医王としての薬師如来が常に薬を携えて待っているという。この薬師の浄土を浮瑠璃世界といい、また操り人形が浮瑠璃といわれるのは、ここに由来する。元来、浄瑠璃姫は薬師如来の化身である。

一方、阿弥陀如来は無量光如来ともいい、そのの極楽世界は「青色青光、黄色黄光・赤色赤光・白色白光」で輝いてい

る。薬師如来の世界とは色彩的に鮮かな対照をなし、しかも如来の名に宝石名を用いる仏・如来は、このほかにみあたらないであろう。

シナで著わされた梵語辞典である『玄応音義』や『慧琳音義』によれば、極楽にある最も高い山、須弥山の南側は瑠璃で覆われ、しかもいかなる宝によっても壊われず、溶けない。また鳥類の王で、神話上の鳥、ガルダの卵殻は瑠璃でできているとしている。

なお、瑠璃をガラスとみた場合もあったようである。古代シナでは、特にガラスが珍重されていたことの影響によるのであろう。

このように仏教には、その奥にあるインドの文化、風俗に親しむ材料が豊富にある。

(西村実則)

覚 悟

現在、私達が使っている覚悟の意味は、

一、さとする

二、迷いがさめて真理をさとる、真智を開く。

三、決心

四、あきらめる、観念する

以上の如く解釈されているのである。

この中で仏教的な意味合いが含まれているものは第二番目であるが、仏教聖典に見られる代表的な用例をあげてみると、楞伽經に、「覚悟とは是れ空無生無二にして、自性の相を離るるなり」、これを用略すれば自ら悟ることであり、また華嚴經では「又光明を放つを見仏と名づく。彼の光明經の者を覚悟せしむ念仏三昧は必ず見仏し、命終の後仏前に生ず」とあり、この覚悟の意味は、他よりいわれて目がさめることであり、さらに大乘起信論には「念の住相に於て覚悟を得と雖も、猶ほ自ら生相の中に限る」とあり、この覚悟の意味には、同じ覚悟においても浅い覚悟深い覚悟があるとする。

このように、仏教聖典に使用されている覚悟の意味においても解釈の相違が見られる。

また、この仏教的覚悟が転化して出来上った言葉に、覚悟の月（悟りを開き、真理を会得したことを澄みわたった月にとえること）・覚悟の臍（はらを固める（かたく決意すること））

という言葉などは、よく小説等に使われている。例えば「扱其後は如何なとなれ、心引きしめて日を送るべしと覚悟の臍を初めて固め是れより謹み慎みて」、また「漸く覚悟の臍を決めたと見えて」、これらのようにしばしば小説にも見るこ
とができる。これは、仏教的覚悟よりむしろ決心として用いられていることが理解できる。また、覚悟の前（あらかじめ、十分心構えしていること）、覚悟はよいか等の言葉においても同様である。

このように覚悟という言葉は、悟るという仏教本来の解釈よりも、決心、あきらめること、観念すること等に用いられるほうが多いのである。

（富田生久）

奈 落

「奈落」は、サンスクリットのナラカをそのまま音訳したものであり、「奈落へのめり込む」というふうに、足が地に着かず、幽冥な状態を意味する言葉として使われる。演劇で

は舞台の床下を「奈落」という。

ただ日常語としては、ナラカを意識した「地獄」のほうが親しみ易い。「こんな毎日、地獄だ」「あの人は地獄耳だ」というようにである。

「地獄に行くと、エンマ様に舌を抜かれる」といわれているが、元来エンマは、天上にいたのである。このエンマは不死者、審判者であり、しかも死を司っていたが、次第に地下にいるとみられるようになった。

この地獄では、人は熱湯の中で煮られ、刃剣の上を歩かさ
れ、犬によって手足がもぎ取られていくのである。その責苦は嗜虐的であるために、オーストリアの仏教学者ヴィンテルニッツは「サデイズティック」とであると表現している。

地獄の観念は仏教特有のものではなく、紀元前三千年頃に栄えたチグリス・ユーフラテス文明におけるシュメール族の間ではクルヌギア、またギリシャではハデスと呼ばれている。死者が住む空間として暗く、あらゆる苦のある世界である。

特に仏教文化圏において、地獄は、インドではジャイナ教より移入せられ、シナでは泰山府君の冥界思想に結びつき、それがわが国においては、殊に浄土信仰の中に受容された。平安時代の源信による『往生要集』には、八大地獄の光景が

描かれている。

なお、仏教では、地獄は餓鬼・畜生・人・天・修羅とともに六道の一つであるために最後の住処ではなく、一つの経過状態としてみなされている。それ故、悪事が尽きれば、地獄から脱して他の住処に生まれ変わるのである。

仏教における地獄としての奈落の思想は、あくまでも方便として欲望に耽る人を戒めるために説かれたのであったようである。このような地獄観は苦悩への深い洞察と、人生の闇をみつめ、日本人の魂の深みを形成してきているのではなからうか。

(西村実則)

果 報

現在、日常語の中に「果報」という言葉がよく使われる。しかしこの言葉も、元来は仏教から出てきたものである。それは因果応報（因果業法、因果報応、善悪業報とも称される）から出て来た言葉である。

「果報」には次の様な意味がある。

一、因果応報　むくい

二、運が強いこと　幸運

などである。一の場合には、前世における善悪の行為が原因となって生じた現世の報いであり、善行を説いたものである。すなわち、善い行いをした者が善い結果、幸福になるという。日常の生活における道理を衆生（私達）に教えてくれたものといふことができる。

因果報を説いている經典をあげてみると、転輪五道罪報応経には「罪福の応報すること猶ほ掌中の瑠璃珠を観る如く、内外にして狐疑の想なし」とあり、浄土経の無量寿経巻下にも、「天地の間、五道分明なり、恢廓窈冥浩浩茫茫として、善悪報応し禍福相承く」と説かれている。

二の場合には前者の場合の解釈が転化して結果に重点を置き、幸福な運の強いということになって来た。たとえば、「果報者」（幸福な人）「果報は寝て待て」（幸福はあせらないうで待っていれば自然とやってくる）等の表現にあらわれている。しかしながら、これを表面的にとらえ、何の努力をもしないで幸福になれると思いがちであるが決してそうではないのである。

つまり一の場合で示されていたように、善い行ないで善い

結果が生まれるのであって、偶然に幸福が降ってくるものではない。

よく世間で立身出世をしたり、巨額の富を得たりすると羨しく思つて「あいつは果報者だ」などというが、これは偶然に起つて出来たものではなく、日頃の努力と人に信頼されたものであり、私達も進んで善行を行い、果報者にならなくてはならないのである。

(富田生久)

有 無

「有無(うむ)」とは、文字通り、有ることと無いことの意義である。一般には、ものごとの諾否を表わす言葉として、「有無の返事」などと使われ、さらに、「有無を言わせず」などといわれるときも同じ用法であろう。また、「有無に」とは、諾否のいかんに関わらずということで、「むりやりに」とか「どうしても」という意味に使用させる。そして、「有無相通ず」という場合には、一方あるいは他方という意味で

転用されている。

有と無、つまりいい方をかえれば、存在と非存在。仏教では、ものごとを有りとみなすことも、また無しとみなすことも、ともに誤まった見解であるとして否定する。別の言葉でいえば、存在や非存在としてものごとを捉えることは、まさに偏見であり、極端論である。古来、「有無の二見」といわれて強く否定されたものがこの考えであり、仏教はこの有無の両極(二辺)を離れた中道に真理を求めるものであるとされた。すなわち、ものごとのあるがままのすがたとは真実不変であり、真如(しんにょ)とも名づけられ、それは有無を越えた真理であり、あるところでは空(くう)という言葉でも説き表わされている(『般若経』)。

大乘仏教の最初の哲学者である竜樹(ナーガールジュナ、一五〇——二五〇)は、その主著『中論頌』に次のように説いている。「仏は能く有と無とは滅したもう。化迦旃延経中の所説の如きは、有を離れまた無を離ると」(第十五章、第七偈)——サンスクリット文より解釈すれば、迦旃延(かせんねん、仏陀の十大弟子の一人)を教化されたときに、有と無とを説かれた世尊によって、有と無との二つはすでに否定された、という意味内容である。

元来、有とは、普通にはサンスクリットのパーヴァ(Chāva)

の訳であり、ものごとの存在、あるいは生存の意義であり、仏教では種々に分類してその真義を把握しようとした。欲界、色界、無色界の三界は三有ともいわれ、存在の世界、生存の場所を総括している。また、実有、仮有、妙有の三種有は、無あるいは空を踏まえた概念として形成されている。そのほか、四有（中有、生有、本有、死有）、七有、二十五有など様々な分類法がある。いずれにせよ、こうした有の概念に対して、無の概念が対極に位置し、この両極を離れて差別觀念から解放されたときに、はじめて中道の正しき道が開かれるというのである。

（原裕）

執

著

よく日常語として使われるので、意味は明らかであろう。

一つのことには固執、耽著することである。「著」を「着」とも書くが、これは俗字である。

執著はサンスクリットのアビニヴェーシャの訳であり、

執、計著、堅執とも訳されることがある。ただし原語のアビニヴェーシャには、勤勉、意図、決定、愛情、願いなどの意とともに愛着、熱愛があり、これが漢訳されて「執著」となったようである。この原語は仏教以外のヨーガ派では、「死の恐怖を起す無知」の意で理論づけられている。

一方、漢訳された「執著」の「執」は、固執での意とともに、単に筆を執る、あるいは阿弥陀仏の名号を執持するというように、心の迷いとは関係のない用法もある。

心の迷い、愛着である執著は、仏教の倫理規定の中において具体的に理論づけられてはいない。五戒の中にも、百八煩惱、あるいは宿業においても、説かれない。

執著は仏教語でありつつも、それほど重視されなかったのであらうか。

教義項目には組み入れられなかったけれども、唯識学という大きな仏教潮流では中心的課題に置かれた。われわれの奥深くにあるアーラヤ識という心に対して、いろいろな分別を起して我執を起す。この我執を執著とみなしている。

たとえば『転識論』に、

「此の識（アーラヤ識）を縁するに依りて第二の執識あり。此の識（マナ識）は執著を以て体と為し、四惑と相応す」

とある如くである。

この「執著」は、大乘仏教において唯識思想及び、われわれは本来、如来になる素質を備えているとみる如来藏思想と相違するにつれて、教義的に体系づけられていった。特に、この両思想の融合した様相を説く『楞伽經』では、十種類の執著を説いているごとくである。

(西村実則)

流 転

私の中学時代からの友人で、大学を出てから長い時で一年半程で職業を次から次へと変えている男がいるが、彼などは職業を転々と流転していると言えよう。このように「流転」は一般に職場などを転々することなどに使われるのであるが、これを「りゅうてん」とは読まず、「るてん」と呉音で読むことから仏教用語から出た言葉であろうと想像することはむづかしい。

仏教において、「流転」は何を転々とすることであるかと

いえば、生死の世界を転々とすることであり、生死を繰り返すことである。五世紀頃に造られた『順正理論』という仏教論書には「生死相続するは是れ流転の義なり」とあり、また『大毘婆沙論』という論書は「流転とは更に生を受くるを謂う」と説いている。

「流転」はサンスクリットのブラヴリッティの訳であり、ブラヴリッティは他に「転生」とか「生起」「生死」なども訳される語である。また、サンスクリットのサンサーラの訳語として「流転」が用いられることもあるが、一般にサンサーラは「輪廻」と訳され、他に「生死」「世間」などとも訳される。したがって、「流転」と「輪廻」は、ともに「生死」と言いかえることもでき、また「輪廻転生」などという言葉もあるように同じことを意味しているのであり、三界六道の生死の世界からぬけられずに苦しみ続けることをいうのである。

すなわち、六道輪廻から離れ再び生れることのない状態（涅槃）となることが、釈尊が出家した理由であり、またその当時の修行者が出家した理由でもあることから、この「流転」という言葉は仏教にとっていかに重要な言葉であるかがうかがえよう。

そして、六道輪廻の生死の世界を離れて涅槃に趣くことは

「還滅」といい、『大毘婆沙論』に「諸の有情に流転の者あり、還滅の者あり」とあるように、「還滅」は「流転」に対する言葉として使われる。

(中村隆敏)

意 識

「意識(いしき)」とは、はっきりした知覚であり、またはその状態、つまり明らかにめざめているありさまの意味である。ものが見えたり、声が聞えたりするとき、心は直接的な体験としてはたらくが、そのことを意識するという。そして、その状態が意識なのである。そして、社会や時代によって規定される思想や見解そのものを指す。「無意識」という言葉がその反対語である。

仏教では、眼、耳、鼻、舌、身、意という六つの感覚器官を、それぞれ眼根、耳根などと称し、六根(六入)という概念で整理している。この六根をよりどころとして、認識作用を営むのが眼識以下、意識までの六識である。またこの場合

の認識される対象は六境といわれ、六根に対して、色、声、香、味、触、法の六つの対境が示される。意識とは、六識の中でも眼根から数えて六番目に位置するから、とくに第六識と別称される。意根を感覚のよりどころとして、その対象である法境を認識し理解するのが意識のはたらきである。

意とは、サンスクリットのマナス(manas)の訳で、末那とも音写されたが、意味内容は思量ということ、思いめぐらす心のはたらきである。そして識とは、サンスクリットのヴィジュニャーナ(vijñāna)の訳で、外界の対象を識別すること、明らかに認識することである。意識とは、心の思いめぐらすはたらきによって対象を認識区別するものであり、心を用いる方面から捉えたものである。

一般的にいつて、六識説においては、意と心と識とはほぼ同じ内容のものであると一応解されているが、この心意識構造をより精密に検討したのは大乘唯識仏教である。唯識学派では、六識説をさらに発展させて、第七識としての末那識、そして第八根本識としての阿頼耶識を設定する八識説を打ち立てた。

このように、唯識学説によって深く考究された意識構造は、近年の西洋思想における心理学的、哲学的研究とも照し合せても、多分に遜色のない概念を形成している。(原裕)



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活(六)

「ただ人にはおはせざりけり」

宝田正道

法然上人は「ただ人にはおはせざりけり」(古今著聞集二)といわれている。はたしてどういう点を指して「ただ人」でなかったのか、今回は上人の容貌や智徳、性格、業績、奇瑞その他、具体的な事例を見ながらその非凡さのいわれを考察してみたいと思う。

まず、容貌についてであるが、諸伝によると「頭圩くぼみにして稜かどあり、眼黄にして光あり」とか、「首圪かたもかに、鹿眼黄にして重瞳輝光あり」ということである。また誕生のときには「頭毛金色」ともいわれている(獅子伏象論所

引本伝)。つまり、頭はくぼみ角張っていて、金毛を生じ、首は平らであるが眼は黄色く光を放っていた、というくらいの意味である。たしかに普通人と比べて異相であるが、当時の人々はこれを「抜粹へつすい聡敏そうみんの勝相」と受取っていたようである。この頭のくぼんだ点をとらえて、後にこれを「法然頭」と称し、近世の画家は上人像を描く際、極端に頭のとっぺんをへこまして描くのが例となっていたらしいが、嵯峨二尊院に伝わる「足引の御影」や知恩院蔵の国宝像(藤原隆信筆)を見ると、それほど格

別に頭の形が凸凹であるとは思えない。むしろ、豊かな体格と眼もとのやさしさから見て、いかにも相好円満で、特別の「異相」といった感じは受けないのであるが、どうであろうか。幼時に「金毛」が生えていたかどうか、これは円頂像が多いのでわからないが、眼が黄色く光を放っていたらしいことについては次の伝説がある。

久安元年（一一四五）、十三歳の春、故郷菩提寺の寛覚の許から比叡山西塔北谷の持宝坊源光の室へ投ずべく登山の途中、洛中で時の摂政法性寺忠通（九条兼実の父）の行列と出会ったところ、忠通はわざわざ車をおりて上人に会釈を賜ったという。そして後に「路次にあふ所の小童、眼より光を放つ。いかにもただものにあらざることをしりぬ」と述懐したと伝えられている（勅伝二）。

話は余談になるが、昔、ギリシア人神父ダマスカスのヨハネ（六七〇頃～七五〇頃）は、ギリシア正教徒の間で「クリュソアス」（黄金を流す者）と呼ばれていた。これは彼の思想や業績の中に黄金のように輝く知性が流れていたことを讃美した言葉であるが、洋の東西を問わず、知性を黄金に譬えることはよくあることで、法然上

人の場合も、あるいは輝くばかりの利発さを表示するのに、異常に人の心を打つ黄金の光という形容をその眼光に配したのかもしれない。俗説によると、剣豪宮本武蔵も、同じような金色の光を放つ黄眼の持主であった、というのである。

いずれにせよ、上人の顔貌は、幼稚の昔から人並み外れた「ただ人」でない勝相に満ちていた、ということはいえるであろう。

次に智徳の面であるが、これも多聞広学とか智慧第一といわれるように、「惠解天然にして秀逸のきこえあり」「一文をさづくるに十義をさとる」点で、「ただ人にあらず」と諸伝が絶讃しているとおりである。だからこそたとえば源光が寛覚からの紹介状に「進上大聖文殊像一牀」と書かれてあるのを、なるほどとうなずき、上人南都遊学の際、法相宗の碩学藏俊が「貴房はただ人にあらず、おそらくは大権の化現か」と舌を巻くシーンも、伝説として生きてくるのである。弥陀如来の化身だとか、勢至菩薩の垂迹とかいわれているのも、みな上人が尋常一様の英俊でないことを示すもので、そうでなければ一

切経を五回も八回も繰返し読んだり、大巻の書を三回目を通せば諳記するなどということは、到底凡人のなし及ぶところではないわざである。

次に性格については、古来「内厳外寛」とか「内剛外柔」という表現が使われていて、法然上人は外形的にはいかにも温和で寛容な相好の持主であるが、内面的にはきわめて厳格で剛毅果断な性格を持っておられたと思われる。ところが、近年、「従来の法然像は大変ゆがめられ、貧しくされている」とし、「法然にしても彼につづく宗教者のそれぞれに圭角のある立論に対して、従来はむしろ円満で妥協的でおとなしい人物として理解されがちではなかったか」という疑問も提出されている（武内義範『鎌倉仏教の苦悩と目覚め』——『中央公論』昭和四八年四月特大号）。

武内氏によれば、上人が武士の生れであることを重視して、九歳のとき、明石定明の漆間館夜襲に際し勇敢に敵に向って矢を射かける胆力をもっていた点を、たとえば史実であるなしかかわらず、「法然の一生を貫いている態度」とし、「晩年まで法然は事にあたって沈着で平

静であるが、同時に果断で毅然とした隙のない人物」であったとする。ところが、耽空の『四巻伝』や『平家物語』（巻十一「重衡のきられ」）などの叙述が、果断の法然を「このようにして心やさしき姿に変形して」行ったといい、「足引の御影」から受ける印象がそれに拍車をかけていると解している。そして「親鸞を『出家とその弟子』の感傷で理解しようとする近代人の誤りと同じことが、従来の法然の理解の歴史の全体に生じて来ている」と指摘するのである。つまり、完成した法然伝や『平家物語』などが、「優にやさしい法然をあまりに感傷的にえがいたからに他ならない」というのである。

法然上人の武士的性格を重視するこの理解は、決して間違っていないと思う。しかし、その指摘は、従来の「内厳外寛」や「内剛外柔」と少しも矛盾することではなく、感傷的に過ぎる法然像が一部の伝記によってつくられた形跡はあるにしても、それはむしろ「外寛」や「外柔」を少し強調しただけであって、上人の「内剛」「内剛」の面は武士道精神そのものである、といっても過言ではないのである。つまり、親鸞と比べて武内氏が

「山容はちがっていても、両者は同じ火山に貫かれてゐる活火山」といわれる、その「活火山」であることの証拠はいくらでもある。

たとえば、その師叡空に対して先達を恐れず直言を吐く態度といい、流罪に際して死を堵しても念仏をやめなかった気迫といい、選択集執筆の際、慢心を生じた門弟安楽房邊西をしりぞけて直ちに真観房感西に代えた果斷の処置といい、いずれも剛毅な武士の血が然らしめたところといえないだろうか。

とにかく、上人の性格は、当りはやわらかいが内には烈々と燃える信念の火を秘めていた、といえよう。それが事あるごとに現われては前述のごとき対応ぶりとなつたもので、これを武士の生れのゆえとするしないは自由であるが、強いばかりが武士ではないことを、十分知っておく必要がある。果斷の反面、広い度量と心のやさしさを見せることにこそ、法然上人の真面目があると考えるければなるまい。やはり上人は、性格的はも「ただ人」ではなかつたのである。

さて、業績の点では、いうまでもなく選択本願念仏の

発見と唱道による「大宗教改革」の一語に尽きるであらう。こんな大事をやつてのけることこそ、「ただ人」でない最大の証拠である。したがって、くどくどと縷述するまでもなからう。

最後に、上人の徳行をいくつか挙げる中で、伝記作者は、いろいろの奇瑞をもつて「ただ人」でない証左としているが、これについて一言しておこう。

上人の別伝のうち、たとえば『本朝祖師伝記絵詞』巻四、『九卷伝』巻九下など、諸宗を訪えば師毎に嗟嘆し、化導を施せば人毎に帰敬するありさまを述べて、「たれの人か闇夜に灯なくして室の内外を照すや」以下、現身に光明を放つこと、慈悲大師の袈裟を相伝すること、太上天皇に真影をうつされ奉ること、諸宮諸院に帰敬せられること、摂政殿に礼拝せられたこと、智恵第一の名を得たこと、没後に花夷男女家ごとに遠忌・月忌や臨時の孝養を営むこと、人ごとに影像を留めて本尊とすること、師匠がかえつて弟子になることなど、上人の徳行としてこれを総括列挙している。今日から見て私にこれを加えれば、「たれの人か元祖の称号を得んや」とか「た

れの人か五十年忌ごとに大師号を賜わらんや」といった類のもので、いずれも上人の伝暦に示されている行業であるが、暗夜に燈火なくして書を読むとか、現身に光明を放つかいいうことは、科学的にどう考えればよいのであろうか。一説にはこれ念仏三昧の故なりと受止められてもいるが、「三昧発得の定力」と一語にかたづけられて得がいくかどうか疑わしい。『三昧発得記』は勢観房源智の所伝で没後に流布されたというが、その中に「その後右目光明を放ち瑠璃壺の如し」という言葉も見えてるので、あるいは極楽の莊嚴を感得する以外に眼からの放光という現象を伴うのかもしれない。しかし、現代人はこれらを一種の奇瑞と解するほか仕方があるまい。

奇瑞はこのほか、上人の別伝以外にも、諸種の往生伝や文学作品などに数多く記されているが、これは夢告や夢想などとともに、特定人物の評価を高からしめるために神秘的な事例を創作して表現する記述の常套手段と考えてよからう。だからどんな荒唐無稽な非科学的記事で

も、奇瑞や夢の内容として逃げれば、ウソとはきめつけかねるので、伝記作者は特にこの手を使うことが多い。法然上人の別伝類でも奇瑞や夢想が多く述べられているものほど、上人の「ただ人」でない点を力説せんがための善意の発露と考えるのが妥当であるかもしれない。

ともあれ、上人はどこから見ても「ただ人」ではなく稀代の大人格であったことは、上述のとおりである。われわれは、この非凡の天才による専修念仏の一行に往生の活路を導かれた喜びと誇りを、十分噛みしめて胸高らかに称名の人生を歩む覚悟を新たにしたいものである。今回は「法語に聞く」趣旨から少し外れた記述となつて申し訳ないが、伝記作者も徳行の総結として言うように、「この中に一徳備へたる人は余事のたらざる事をうらむべし」である。われわれは残念ながらその一徳さえ備わらぬ身であるが、たとえ一徳に近い業績や奇跡をもつ人といえども、なおかつ上人の徳行を範として励むべしという意味である。



欧米宗教見聞録

第五回

開教使

△▽

安居香山

(大正大学教授)

アメリカ本土の浄土宗関係の開教使の開教事情に続いて、ハワイの事情を見てみたい。ホノルルの別院を含めて十六もの開教寺院を持つ浄土宗は、極めて盛んな開教をしていることとなる。先般、藤花総長夫妻が帰国され、東京の歓迎の宴が持たれたのであるが、師は実に四十年間この道に精進されたということ、その苦勞は大変であったと思われる。

「毎日毎日が、これ闘争でした。」

と述懐されていたが、確かに日本のような檀家制度に安楽に乗っているわけではなく、常に信徒を寺院に集めて、教化活動をする必要があるだけに、大変である。キリスト教団の風習として、教会が人間の生から結婚、そして死を取り扱うように、仏教寺院もこれにならって、教化

が行われている。日曜毎の礼拝が行われていることも当然である。

ところで、ホノルルのように街も大きく、信者も多い所は、猫の手も借りたいほどに、何かと雑用もあり、又それなりに収入もあるので、忙しかわりにその維持も容易である。しかし、十六の寺のすべてがそうであるとは言えない。各島にある寺院は、場所によっては信者数も少なく、従ってその維持も困難である。寺の維持だけではない。開教使の生活そのものを続けるだけでも、大変なところもある。結局するところ、自立自営の開教であるから、開教使と言えはいかに聞えはよいが、その実、いろいろと苦勞されている人もあることを知らねばならない。宗門としても、こうした点では、もっと積極

ホノルル浄土宗別院（藤花総長を囲んで）



的に活動に協力する体制をとらぬ限り、将来はこの事情も先細りになる心配がある。最近、本土との交流が盛んになり、そうした認識が次第に増していることは、誠に結構なことである。

私はハワイの全寺院を廻ったわけではないので、総てについてその実態を報告できないが、二三の状況を報告して、他を推して頂くことにしたい。私の親友新保義道師については、たびたび報告の中にでてきているが、こ

こでも登場してもらうことにしたい。師の寺院は、今カフルイにあるが、もとはブーネネにあった。砂糖工場の移転に伴ない、住民が移住したので、寺も移転せざるをえなくなつて、現在の地にきていることは、前に報告した。

師が始めて赴任したのは、もう十八年も前のことであり、その頃はブーネネにあったわけであるが、その当時の寺の収入は極めて少なく、師夫妻の生活費にも事欠き、大変苦勞されたらしい。奥さんはミシン仕事をして賃かせぎをし、余暇には野菜も造つて、食の足しにしたという。大きな希望に燃えて若い夫婦が、小さな二人の子供を抱えてこの地に来てみて、これ程の苦難が待ち構えているとは思わなかっただけに、その心情は察するに余りあるものがある。しかし、二人は助け会つてこの苦難を乗り越え、寺の移転も見事にやつてのけ、今では住民も豊かになったせいもあつて、収入も増して来た。

しかしながら、やはりそれだけでは難しいので、日本語学校を開いて収入をはかつている。ラヂオ放送にも関係し、この頃では夫人がこれを担当し、毎週三時間番組をこなしている。師は今やマウイの文化人として地方住民の代表的人物にまでなつているが、此処までくるには、二十

年近い苦労と努力があったことを、忘れてはならない。

日本語学校は小中学生を対象にしたもので。夫妻がそれぞれ分担してやっている。夫人は日本におられた時、小学校の正教員であったので、その経験も豊富である。

しかし、英語を混えての日本語教育であるから、生易しいものではない。一日その様子をみせてもらったが、夫妻共、なかなか楽しそうに、子供達と談笑しながらの教育であった。日本の小学校の教科書を使って、ワイワイと賑やかに教育が行われていた。

この日本語教育は、単に生活の資としてのものであるだけでなく、それ以上に重要な意味がある。それは、信者達が、二世・三世へと移っていくと、日本語ができなくなってくる。自然、日本語を通しての開教ができなくなり、信者が遠ざかっていく。こうしたことへの歯止めとして、是非共、日本語ができるようにして置く必要がある。又信者の家庭でも、親は日本語で子供は米語では、意志の疎通さえ欠けてくる。これは大変なことである。こうしたことが、子供達を日本語学校に通わせてくる理由である。開教使達は、相互依存ということになる。

勿論将来は、日本から派遣する開教使は、英語で説教

できることが必要である。一世も残り僅かとなれば、尚更であるが、更に対策を拡げて、米国人そのものへの開教も考えるべきであって、その点、大いに将来の課題と言えよう。

日曜礼拝は、信者と寺を結ぶ大きな紐帯であるが、これも余程努力しないと、多くの信者

を集めることができない。クリスト教の教会でさえ、この頃では日曜礼拝に来る人々が少なくなっている時があるから、仏教寺院においても、同様である。丁度日曜に



新保師の日本語学校



日曜講話

当っていたので、私も新保師の寺の日曜礼拝に出席し、請われるままに一席講話をした。もともと信者の数のそれ程多くないこの寺ではあったが、相当な人が参詣し、私の話に耳を傾けてくれた。やはり、若い人は少なかった。何か特別の行事の時は、老若男女つめかけてくるそうであるが、日曜礼拝となると、常連であるようである。それだけに、開教使は気をつかう事になる。

英語を主とした日曜礼拝の読経形式も、寺々によって工夫がこらされている。オルガンの伴奏によるこの儀式

は、多分にクリスト教の教会式であるが、司会は信徒の代表がやっていた。われわれには、目新しいこの儀式も、時代と共に変遷するのであらう。

ラハイナの浄土院は、原源照師が開教使として活躍中であるが、師の活動は極めて対外的である。寺の経営も本堂や鐘楼、三重の塔など日本式建築をそのまま持ち込み、一角に日本寺院を再現している。それはそれなりに珍しいので、多くの観光参拝者がくるようである。これ



礼拝する信者たち



ラハイナ浄土院（マウイ島）

なども新しい試みである。さして大きくはないが、大仏さんもできている。本堂内にいま壁画がすめられている。

こうした寺門の経営も、寺維持の一つである。果して観光として、どれ程の収入があるのか知らないが、こうした形で日本仏教を紹介するのも、一つの方法であることは、確かである。原師は更にこうした方向を充実して、文化会館の建設まで企画されているらしい。

お茶やお花などを教えているところもある。最近ホテルに創設されたばかりの天台宗別院などは、信徒が未だ少ないので、あらゆる分野の文化活動を行い、寺の維持と発展を企図されている。日本文化を紹介しながらの宗教活動であるわけで、海外布教として、興味ある方法ということができる。

いずれにしても、開教使達の創意と工夫の中で、開教の道は大きく開かれてくるもので、開教使達は日夜その工夫に意をそいでいる。それは尊い仏行であると共に、日本仏教の先兵として、重要な職責である。われわれはこれに心から敬意を表すると共に、できる限りの協力をしてさし上げたいものである。



法然上人の御書

鎌倉時代書道史上不滅の名筆

林 錦 洞

(書 道 家)

長承二年四月七日、御高承の如く、宗祖法然上人御降誕の月である。丁度今から八四二年前のことになる。そこで今回は上人の御真蹟にまつわってお話をして見ようと思う。

どの宗でも開祖の墨蹟は殆ど現存するものが多い、また研究も尽されているのだが、法然上人の御真蹟やこの方面の研究は全く未開拓である。戦後漸くその緒についたと言えようか。上人真蹟資料の少ないことと研究調査の不足ということから、上人は能筆でなかったと思われる向きもあるが、決して

そんなものではない。私はむしろ鎌倉時代の書道史上にも特記されてよいと思うのである。

関白兼実公を初め父の藤原忠通、子の良経など、上人選択集撰述の因縁もさることながら、これ等の人々は平安末期から鎌倉にかけて、日本書道史上における代表的書家でもあったわけである。こうした環境で絶えず接触を持たれたであろう上人が、無筆であるとは考えられない。何時何処で書の勉強をされたと言う史実はないが、充分にこれを推測出来る資料はあるわけで、まして智慧第一と称された頭脳

と豊かな感情も持たれた上人のことである。必ずや書の研鑽も怠らなかつたに違いない。先年開宗八百年記念に、教区で複製した上人の御名号がある。今これを表装して本堂に掛けてあるが、この御名号は選択集内題のものを拡大したものである。半折の大きさに拡大してあるのに微塵の隙も型の不均整不均衡も感じられない。仏の最後の縦画など誠にゆとりとその中に鋭さがくみとれる。能筆でなければ、通常拡大した字は崩れて、しまりもなく、だらけたものになつてしまうものだ。筆の運びに鋭さ、張りがあり、筆先に弾力があるから、ゴリゴリ押しつけて引きつり廻わすような筆使いをしておられない。書の真髓をわきまえたものだけが引ける墨の線である。

先年発見された奈良興善寺上人御消息文の中に、正行御房という掛紙がある。その正行御房の行や房の縦画と、先程の御名号の筆意は全く同じである。書状についても同じことが言える。「御ふみくははしくうけた方はり候ぬ」と言う書き出しの書は、とつぷりと墨を含ませた小筆で、呼吸深く静かに運ばれ、然も一呼吸毎の抑揚、強弱が太く細く、二行目後半で墨のがすれのまま、濃淡の変化となつて反覆

されてゆく、技量未熟では一筆で一行二行と書けるものではない。まして渴筆のまま連筆などとても出来ないものである。然もこうした全体の筆意の中に自づと「世尊寺系」の書風、貴族間に尊ばれたこの書風の気品のようなものが感じられるのである。上人の智慧第一という知性と不動の信念といったものが内包されていると思われる。

更に一つ、今、上人をとりまく二三の人々や史実の中から書道との関連をのぞいて見よう。

兼実の父忠通は、尊円親王が「忠通が世に出てからは天下一様に忠通の書風が行われ、後白河院から後嵯峨院まで、ずーっと行われた」と言つてゐるように、一世を風靡していた書の名人であつた。子の兼実も建春門院や後白河法皇の為に写経や題額を書いている。兼実三十五歳の時と言われる東大寺仏舎利奉納願文は、南都焼打で焼失した東大寺の再建に際して仏舎利を奉納した時の願文である。父忠通仕込みの所謂「法性寺流」の書風で、その中に豊潤清勁な気品に満ちたものである。兼実の子、良経も後「京極流」を称して能書の聞えが高かつたが、若くして兇刃に倒れている。急逝にあつて兼実は、先月号で

紹介した羲之蘭亭曲水の宴を催する予定をとり止めた程であった。

文治四年、後白河法皇は上人を先達として写経を修せられたとある。亦上人御遷化の三七日の法要には正信房湛空が施主となって王羲之の十二行八十餘字の搨本を奉納したとあり、その時に和歌一首が捧げられた。

西えよし 行くべき道の しるべせよ

むかしも 鳥の跡はありけり

つまり中国、殷代の古文は鳥や獣の足跡からヒントを得て文字を考察したと言われ、今日甲骨文として書芸術の制作活動の中心になっているものである。上人西方浄土への道標として供養することの意味しているのであろう。門弟にもかなり書に関する知識や研究をしていたものが居たということになる。東大寺勧進の俊乗坊重源などの剛放な見事な風格の筆跡がある。

こうして見て来ると上人だけが書を能くされないなどとは、どうしても考えられないことになって来る。西方指南抄には上人の文章・書簡が多く記録されてると言うが、現実には伝えられてるものは極めて

少ないのである。選択集巻頭内題、七ヶ条起請文花押・清涼寺熊谷直実書状・一枚起請文・興善寺書状であり、外に上人御影讃文偈など数点に限られる。

地方寺院での六字名号は信仰上恭敬礼拝するは別として、偽筆が多いように思われる。各寺に於て克明に寺宝等の再調査検討によって真蹟の発見に努めて頂きたいものである。未発見の真蹟は興善寺書状のように、元久年間以後の他宗の迫害が激しくなったにつれて、胎内など然るべき場所に秘蔵したことと考えられるからである。

ともあれ、上人筆蹟の研究は戦前僅かに二三を数え、戦後興善寺書状を中心に漸くその緒についたと言えよう。特に書史的な究明はこれからである。上人の書についての研究は、ともかくにも真蹟の発見につとめることであり、併せて従来真偽不明の伝存寺宝什などの再検討を試みることから始めねばならないと思うのである。

八百年も前の上人の息吹きをそのまま感じさせる書状・書は、まさしく「百世人に伝えるに書を以てす」の言葉の通りである。



心の履歴書 Ⅳ

川内 知光

(京都市西賀茂西方寺住職)

旅行の話

中学校時代に他の学科はとにかく「地理」は成績が大変良かったのです。宗教大学時代には東京近郊のハイキング連を集めてその頃めづらしかった写真機をぶらさげて散策を致しました。

宗教大学の休暇に帰る時は必ず友達をさそって急行券の一回を節約して北陸線、中央線、東海道線、と行程を更えて一泊一円五十銭位の旅をしました。また仏専時代には、岡山、広島、愛媛、香川の伝導旅行、また朝鮮、満州への伝道

旅行もいたしました。その時の乗車船券が全額で十円だったと思います。

宗教大学時代には北海道樺太へ伝導旅行をしたり、中部商工会議所の千名の観光団に入れて貰って上海、南京、杭州、青島を見ましたが、上海の新々公司以千人の大宴会がありまして象牙の箸がついていたので持って帰ろうと思ったのですが、これは国辱になると思ってやめました。あとで聞きましたらこの国辱者が二十人程あって団長が弁償したと言うことでした。

日本国内は秋田、山形県を除いて殆んど廻りました。

海外は卒業してから、インド、ネパール、タイ、香港に仏蹟参拝いたしました。

私は台湾には是非行きたいと思っていました。蔣介石は

日本の戦死者を誠意をもって慰霊してくれたし、戦争賠償金も一文も請求しなかったばかりか、それよりも連合軍が日本に進駐する時、中国は九州に、ソ連は北海道に、本州四国はアメリカ軍が駐在することに決定していたようでありましたが、蔣介石主席は、これでは日本が可愛相だ、中国が辞退すればソ連も手を引くだろうしと考えて進駐を辞退してくれましたので、幸に日本は米軍一色になったのであります。この意味で私は僅少でも台湾に買物をしてドルを台湾に落して来たいと思っています。

三分されてしまつたら九州に行くのにも旅券が要り（沖縄がそうでした）親類との交流もできず、日本は三地方が朝鮮戦争のようなことはしないでしようが、洵に蔣介石様々で台湾には行きたかったのです。

ところが折良く京都府仏教会で沖縄、台湾行きが計画せられて、私達夫妻は喜んで参加したのです。

そして幸なことに友人に台湾日本大使館の参事官をしている人と仲良き関係である事が分り紹介状を頂き、また連絡もして貰ったのです。私個人としては蔣總統に京都の写真帳等の土産の用意はしていたのですが、台北の宿舎にて団長の泉涌寺管長、京都府仏教会理事長その他主な方に集まって頂いて、上記のような始末でありますから蔣總統に拝謁したらど

うですか、と申し上げましたら全員賛成して下さいました。そこで一時間程すれば参事官が宿に來られますから御話しあいをして下さい、もし会見が許されるならば甚だ勝手ですが一人三千円程出資して頂いて、十万円位の西陣織のテーブルセンターでも帰国後お送り申し上げたらどうですかと申しますと、これも全員賛成して下さいました。

参事官が來られて団長からこの由を申げましたが、参事官が言われるのには、總統は日本で言えば天皇陛下のようなお方ですから今日言つて明日会見と言う訳には大使館としては扱いかねる、總統の日取りを聞いて何月何日何時と言うことになれば、私は責任をもって拝謁できるように約束したしますと言うことで当方の勝手な言い分は通らなかつたのであります。参事に前記に掲げた蔣介石の日本に対した行為の真偽を尋ねましたが、全くその通りでありますと言うことであります。

私は二、三の工場で、韓国は日本の文化の御師匠さんである、それに対して日本は朝鮮征伐その他悪いことばかりしている、韓国の人とは仲良くしなければいけないという講演をしたことがあるのです。

この外に日本はボツダム宣言を直ちに受けいれていれば朝鮮は二つに分れることがなかつた。日本がグズグズ一週間も

受諾を遅らしたために、ソ連がどんどん入り込んで来て三十七度線で二つに割れてしまったのです。この話は工場の労働者の中に半島の人がいるので致しませんでした。また仏教会主催の韓国旅行があり、各寺院を参詣いたしました。が、ガイドがこの寺は豊臣秀吉の時に焼かれたと説明せられたことが二、三ヶ寺あって嫌な気分でありました。

仏教タイム主催のインドネシアのボロブドール仏蹟参拝も夫妻で参加いたしました。この時は家内がバスから落ちるやら、バリ島で私が胃潰瘍を発病してシンガポールの病院に十八日間入院後、帰国しまして切開手術をいたしました。が、シンガポールでは五十余万円を支払ったのに、日本では老人のために無料扱いでした。私は講演の度にこの話を持ち出して日本は結構な国だと話しております。

地理好きで旅行好きの私はいつか温泉を五十カ所入湯しようと思いましたが、これは達成してしまつたので、次は年令だけ入湯の悲願を立てましたが、これも八十歳にまだ間があるのに八十以上に達しました。

私は死ぬまでに、せめて上海だけは行きたい、次はインドと考えていたのですが、これも達成いたしました。次はアメリカだったのですが、今は歴史のないアメリカには全然魅力を感じないのです。できればセイロンと思っておりますが、家

の者は私がシンガポールに入院している間電話にて二、三回連絡はいたしました。が、留床中の家族は食事時に台所に集まると全員心配で、黙りこくって憂鬱だったことを思うと、お爺ちゃんの海外旅行は全員不賛成だと満場一致否決せられるのには弱っております。

読 書 に つ い て

終戦の翌日古本屋に行つて二宮尊徳全集を買い求めまして、これからはこれで行こうと決心したので。

そして毎月西方寺婦人会を十五日に開いて私が一時間余講話することになりました。が、二宮尊徳全集は一向に用を足さず、仏教の話が中心になってしまいました。しかし、毎月同じ人工講話することは材料にも困るようになり一週間位前から二十冊位の本を並べて材料を造つていたのですが、これは大変苦勞の事で、弱つてしまいました。そこで思いついたのはポスター等の厚紙をハガキの半分位に切つて読んだ本の中から名句を書きぬいて、地獄、極楽、臨終、往生など百五十の項目に分けてこれを袋に入れるようなことを始めまし

た。

また一日百頁以上読まないと言わないという自律を作って、今も続けているのですが、昭和四十一年、仏教大学に恵谷学長を訪ねて、私が往生しましたならば、此の仕事を続けてくれる人に差し上げて下さいと言ったことを言っていて頼みに行きましたのです。学長はこれは布教師が教材を欲しがっている大変に貴重な資料と思うから、仏大から出版させて頂けませんかと話の方向が変わってしまいました。そして坪井教授や中外日報の高橋良和先生に大変御厄介になって「生きるための断片」と言う本を出版いたしましたして二千冊以上の出版を見まして浄土宗の本としましてはベストセラーの中に入る位の出版となりました。

始めは布教師の資料と思ってとりかかったのですが、段々書きぬいて行く間に一般向にしようと思が出て来まして結局中途半端の著述になってしまったと思っております。

此の仕事は未だに続けていますがメモは恐らく三万枚以上になっているのではないかと思います。次は一般向きのものを出版してみたいという念願は私から放れないのです。これは出版して下さる出版社があるかどうか分らず、私の生涯中、これが完成できるかどうかとも判然いたしません、成し遂げようとする気概だけは持ち続けております。出版のでき

るかできないかは問題は別として老齢になった私が、未だにこの念願を持ち続けているだけでも私は結果は兎に角として幸福であると思っております。

仏教大学に社会福祉科のできる時と、文学部ができる時に何冊か忘れましたが、千冊近い蔵書を寄附いたしました。

婦 人 会 の 発 祥

私が学校を出ました大正末期に村の青年団長や、郡の連合団長をしている頃は、処女会も盛んな頃でありました。男子は正月、涅槃会、八朔などの会合がありましたが、婦人連の会合のないことに気がつきました。しかしこれを自坊西方寺の婦人会とすれば檀家の人しか集まって来ないので、幸に私の村には太田垣蓮月尼が晩年の十年住居せられ、お墓も私の寺の上に寝わつていられることを機縁として、十一月十日の忌日に大宮婦人会の名称にて発足。宗門外の一流の講師を頼んで精神講話を開くことにいたしました。毎年百人内外の参詣がありました。国防婦人会、愛国婦人会ができる頃迄十数年続け相当効果が上ったのでないかと思いますが、会員も

なく会費もなく講師の謝礼やお茶菓子などは私のポケットから出していた訳ですが、会員の資格のない私が会長であるという妙な婦人会であったのであります。

つけうまの話

私が所長をしていました時の朝、所長室に丹前姿の職員四人と洋服を着た一人の男が入って来ました。昨夜四人で二三ヶ所酒を飲んで遊廓に泊ろうと言うことになり、誰かが金を持っていると思つて遊んだのですが、朝の勘定になつてみると支払いができませんのでつけうま（洋服の男）をつけら

会員の皆様へのお願い

既報の通り、諸経費の高騰により年会費の値上げを余儀なくされ、下記新会費にて実施させていただきました。事情ご賢察の上で理解ご協力の程宜しくお願いいた

れて来たのです。

「誰かに見つけられなかったか」「裏から入りましたので小使のおばさんにだけ見られました」「君達は官吏であり、こう言うことをすればどのような処分をうけるか分っているだろう」「ハイ申訳ありません、今後は一切このような非行はいたしませんから御勘弁下さい」と言うことで私は十何円かの金を支払つてやつて、「三人は丹前をぬいでこの押入の中に入つていなさい。誰か一人この人とタクシーで洋服をとりに行きなさい」と言つて小使のおばさんに口止めをして大風呂敷を借りて、これはタクシー代だ何らか渡して事は無事落着いたしましたが、その年の衛生掃除の日にその四人が来てお寺の隅々まで奇麗に掃除をしてくれました。

します。

尚、すでに今年度以降の会費を納入されている会員各位におかれましては、期限切れをもつて新会費に変更させていただきます。

◇ 新年会費 11,000円



— 読者のたより —

ハガキでひと言

三宅 瑞穂

(和歌山県日高郡光明寺住職)

庭に大きな木犀が一本そびえている。此の頃になると風がなくてもはらはらと散っている。掃いても掃いても、次から次へと散って、きれいでいる間はなかなかないものである。見上げると、どうやら先端の方から散るらしい。梢には新芽がすくすくと伸びている。元の葉は枝にくっついたままだ。一年間、己がつとめを果した葉が散って、これからは新しい葉の活動する時期に入るのである。恰かも人生の旧世代と新世代の交替を意味するかのようである。

掃けば散りはたけば又も散りつもる

人の心も庭の落葉も

先賢の歌が懐しく思い出される。

落葉は秋に限ったことではない。それにしても煩惱具足の自らを省みて、愧しい次第である。

栗原 平助

(大分県別府市在住)

モダン爺さんを自認する私。孫はもちろん、その友人や近所の若ものたちからも、もの分りのよい老人として扱われている。

しかし、明治生れの私にとって、戦後の教育を受けた若者たちと、心からとけ合うことは至難の技でありました。何か一つ取っても、考え方が違うし、とまどいの連続。どうせ共に生きるならば、たのしく過したいものだが、どうすればよいのか。いろいろと考えても名案は浮かびません。

そこでまず、気持はすぐに変えにくいからと、表面から変えてみたのです。少し恥しいところもありましたが、若づくりをし、進んで若者の中にとけ込むように心がけました。

すると、今まで誤解していたことなどが、少しづつとけて来ました。老人が危惧しているより、若者はしっかりしてい

る。マスコミで喧伝している無軌道な若者の姿は見出せないどころか、逆に教えられることもしばしばでありました。

若者の中の老人。この年になってたのしい人生を分かち、教えてくれた若者たちと共に残り少ない余生を、安穩のうちに過したいと思っています。

川村 悠穂

(静岡市大鰐町西福寺住職)

ふだん、お寺まいりもろくにしない人が、お盆になると急にお寺のことをいい出したり、お棚経に檀那寺の和尚さんが行かないと、なぜ、私の家へは来てくれないかとなる人があるのは、どうしたことでしょうか。人前ばかりではなく、お盆というと、やはり亡き人を思い出し、やるせない気になるのではないのでしょうか。

單純に棚経廃止論を出す人もありますが、一年に一度なつかしい故人を憶い出すことは、私達の心を洗い直す、良い行事の一つだと思います。邪宗門改めに基くなどと理屈をいつたり、大変だからといって起るより、人情を考え、工夫し、明るく受けとっていくことが大事なことでないでしょうか。

小島 文夫

(東京都狛江市在住)

「少しは静かにしてよ、頭がいたくなるじゃない。全くうるさい子たちね！」

隣りの奥さんのキリキリ声が聞えてくる。梅雨のシーズンとなり、遊び場を失なった子供たちが狭い室内ではばれていられるらしい。ジメジメとした日々が続ぎ、気分がスツキリしないところへ、子供たちのさわぎ。我が子といえども、ついとなりたいたい心境となるのでありましょう。

人生いかなる場合でも同様であるが、順調にことが運んでいくうちは、気分爽快であり、こういう時は何をやってもうまくいく。ところが、ひとたびつまずくと、さあいけない。関係のない人たちまであたりちらす仕末。

こういうことは誰でも日常の生活で、当たり前でありましょう。しかし、己れが気分の悪い時は、他人も悪いと考え、己れを押えるべきでありましょう。人生が第一。降雨に打ちしがれながら、なお縁を増す木々の中に、己れの姿を見つけたいものだ。

念佛ひじり三國志

(四)

——法然とやぐろ人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

盲目の少年は、西光にうながされて、琵琶を取り上げた。

「いつもの伊勢瓶子（へいし）を弾ずるのだ」

西光はかなり酩酊していた。

「はい」

生仏——当時は綾小路資時と呼ばれていたが、この少年は妙なる琵琶の音（ね）にのせて、玲瓏とうたいあげていった。

女人、盛りなるは十五六
二十三四までとか
三十四五にも成りぬれば
紅葉の下葉に異ならず
まして卑しき伊勢瓶子（平氏）
酒濁るるひまもなく
うち転ろげてぞ碎かるる

少年の歌にあわせて西光は、手のしろ酒器を床へ投げた。
瓶子は転ろがり、その細くなっている首の部分が、ぼろりと

<瓶子の首>



前号のあらすじ

五郎次老人たちの無残な最期をよそに、源義経は追手を逃れて必死の逃亡を奥州路へと向けていた。八風峠から伊勢路へ抜ける八風街道は、平家の重要な戦略ルートであったが、折しも武士団のあわただしく往還する街道で、義経は俊乗坊重源の一行に呼び止められた。すでに平家の六波羅屋敷の怪火のいきさつを察知していた重源の勧めで、ひとまず背中に経具を背負った山伏姿に身を変えた義経は、平氏の陣屋でもきびしい検問を無事に逃がれることができた。この伊勢路で受けた体験が、後の義経に大きな影響を与え、いわゆる安宅の関所を突破した勅進帳の逸話が思い出される。そして時世はすでに火急を告げ、八風街道の平家の武士たちの動きは、都における平相国清盛の動きを映していた。福原遷都——清盛宿願の大事業がいよいよ間近にせまっていた。

かけて落ちた。

「やあ、瓶子の首がこけたぞ」

「平相国の首だ」

同調して手を打ったのはこの山荘のあるじ法勝寺執行の俊寛僧都だった。

治承元年の五月。鹿ヶ谷の山荘には十名近い公卿や高級武家が密会していた。いつもだと後白河皇も連座されるのだが、今宵、お徹行（しのび）はなかった。

大納言成親が、近作だと前置きして今様の文句だけを綴った。

ちはやふる松の尾山の清森（盛）も

流れ尊き後白河

根ごと洗われ立つ瀬なきだも

「資時、これに曲付けをせよ」

「令様にしては語句がととのひすぎております」

盲目の生仏は、いまの文句を口中で反芻しながら異議をとなえた。

「古歌のたしなみが深すぎるわけだ。もっとお崩しにならぬ今度の大事は成就しませんぞ」

と、俊寛も成親大納言を批判した。

平家覆滅の謀議が、こうして夜な夜な鹿ヶ谷ではくり返されていった。

誰かが大欠伸をした。酒座のムードをぶちこわすような響きがあった。

「誰じや、いま欠伸などしたのは？」

西光が聞きとがめた。

「わしじや」

「多田の行綱か、このだいいな評定で欠伸など不謹慎きわまらないぞ」

「だいいな評定が聞いてあきれる。夜な夜な集まってするのは酒を喰らい、今様を歌って、大ボラを吹くだけではないか。かんじんの平家覆滅の手だてが何一つきまっておらぬ」
多田藏人行綱は、多田源氏の統領だ。今度のクーデターは、最も重要な兵力を握っていた。

行綱は売り言葉に買い言葉で、腹藏する不満を並べ立てた。

だいたい今回の決起には平家一門への個人的な恨みが動機となっているふしがある。

まず法師西光だ。

彼の領分、加賀白山権現の荘園が、近くにある比叡山の莊園を守る衆徒（僧兵）によって強奪され、領主だったわが子師高は尾張へ追放されてしまった。白山権現はもともと比叡山の別所なのだ、と衆徒らは主張する。背後には、延暦寺の明雲座主がいる。

そこで西光は法皇に明雲の追放を願い出たが、清盛の索制があって、思いどおりにならない。明雲は清盛が出家した折の師僧なのである。

「おのれの利権を守るために、わしらを利用したようなもの

じゃ。また新大納言にしても……」

と、成親の方へ開きなおった。

望んでいた左大将のポストを平重盛に奪われた。さらに重盛は内大臣を兼ねた。それまで兼職していた右大将の椅子が空席になった。せめてそれでも、と成親が求めたら、清盛は次男息子の宗盛にばいと与えてしまった。

「口では平氏の横暴をなじり、大義を説くが、心は大将の烏帽子だけしか見ておられぬのではござるまいか」

「それは違う、行綱」

大納言はわりあい冷静な口がきけた。彼は酒をたしなまな

成親の妹は平重盛の正室である。また娘は、重盛の嫡子維盛の妻でもある。現在の公卿のなかで自分ほど平家と濃厚な縁故を持つ者はない。

左右大将の椅子も、じつは何度か清盛から進められたのである。しかし今ここで自分が受けたら清盛に口実を与えてしまう。

藤氏にもちゃんと立派なポストを与えているではないか。

平家横暴とは言わせぬぞ、という口実だ。

「わが曾祖父顕孝この方、平氏がわが家に蒙った恩恵ははかり知れない。いま自分が平氏に取り入れればどんなことでも出

来る。だが、あえて平氏打倒のために立ったのだ」

成親は諄々と説いた。

天下の政道のため後白河法皇が清盛打倒を決意されたのだ。臣下としてこの挙に加わるのは当然ではないか。

「行綱は私利私慾だと申すが、余こそは全く私心なくこの座につらなっているはずなのだ」

「法皇のご決意はそのように固くあらせられるのですか」

行綱はあらためて念を押した。

「お固い。この席にいる誰よりもお固いのじゃ」

このとき若い平判官康頼が語気も鋭く行綱に詰め寄った。

「行綱、おぬしとて幾たびも席につらなり、院の御所のご意

志は知っていようが、今更何を申したいのだ」

「ううう……」

と多田藏人行綱は嗚咽を洩らした。そのまま泣きくずれてしまった。

やがて、

「ああ不覚じやった。法皇はいつもの今様を歌われるぐらいの、軽い気分だと考えてきた。いかに法皇の御陵威（みいつ）を以てしても強大を誇る平氏の兵力を前にして覆滅なぞあり得ぬことではないか。いったいどんな手段で兵をおこすのであるか。それが聞きたかったのだ」

總司令官格の大納言成親は、ここで初めてクーデターの実動計画を行綱に明かした。

決起の日は来月、六月七日の夜である。祇園の神事があ
る。当然、清盛は福原から上洛して六波羅で一族を集めて酒
宴を張ることだろう。

多田藏人行綱は八条表から主力たる源家の兵で押し寄すべ
し。俊寛僧都は法勝寺の衆徒を率いて七条の小門より向うべ
し。近江入道式部大夫成雅は修善寺の西裏へ押し寄せて、竹
林に火を放つべし。

すでに後配分担までが出来上がっていたのである。

「これならば」

と、行綱は武人らしく実戦の細目をただしたあと、大きく
うなずいた。

「源家大將軍、とわしらはそなたを呼ぶことにきめているの
だぞ」

さつきのもつれを解消するように、西光は盃をさし出しな
がら言った。

「源家大將軍か。おこがましくて名乗れるか。院の御所のた
め、一卒となって六波羅で斬り死にする所存じゃ」

行綱は頼もしく言い放って、酒をほした。

一一

鹿力谷から姉小路へ帰るには三条大橋を渡ってゆく。

すでに夜もふけて、人影はなかった。

盲目だが、生仏の足もとはしっかりとっている。先天性なの
で、盲目なりに成長したため、かえって感は鋭かった。俄か
者とは異なるのである。

生仏の感は、足もただけではなかった。

「今宵の藏人どのを、どうお思いですか」

と。少年はささやくように西光へ声をかけた。

「行綱が……どうぞしたか」

「変心なざったではありませんすまいか」

「変心？」

「そんな気がしてなりませぬ」

「まさか。考えてもみよ。加盟した武士は、行綱ひとりだ、
多田源氏の兵力が頼みであるぐらひは、容易に平相国も見抜
いてしまう。とすれば、かりに密告したとて、まっ先に処刊
されるのは行綱自身ではないか。理はそのように動くものじ
ゃ」

「そうですか」

生仏の声は不安定である。その理に、うなずけぬようである。

「おぬしの感が、常人よりすぐれていることは、これまでにもしばしばはあった。だがこの場合に限って、それは杞憂と申すものだ」

「法皇が……と念を押されたとき、資時は胸をつかれまして」

「法皇がと念を押してからじゃと。なぜだ」

「わかりませぬ。ただあのととき、ハッとしたのでございます」

「法皇がのう」

西光は歩きながら考えこんだ。少年の直感に理の裏付けをしようと思案する。

長年にわたって北面で仕えた西光は、ものの考え方がどうしても理論的になる。現在で言えば警察庁の長官のような立場であったからだ。法制が世界観の基底をなしている。

西光は、姉小路の旧信西邸に着くまで、少年が投げかけた謎を解くことができなかった。そればかりか、酔いがいちどさに発し、妻に酒の用意をさせて盃をかさねた。

そのあと淫らになって。妻を抱いて眠りこんでしまった。だいじなひとときを、西光は逸したわけである。

この深夜、多田藏人行綱は福原さして、いっさんに馬を走

らせていたのである。

不安があった。

あの席には近江中将成雅もいた。実動計画の細目を大納言成親から打ち明けられたとき、僧形の成雅（出家名は源蓮浄）の表情が動くのを行綱は見逃さなかった。

修善寺の裏手で竹林に火を放つ役配をふりあてられたこの男も「裏切る」つもりなんだな、と確信した。

密告裏切りは、半刻でも遅延すれば敗北者にまわされる。露頭したあとでは無効になってしまうのである。

近江中将より一刻も早く、と行綱は馬を走らせている。

福原の平家邸に駆けつけたとき、すでに夜はすっかり明けきっていた。ただちに清盛に面会を求めた。

「多田藏人だと？ ふだん滅多に來たことのない男が何の用事だ」

清盛は首をかしげながら面会に応じた。

これも行綱に幸いした。

六波羅で、留守居の將に訴え出たりしていたんでは、どのように事実を曲げて清盛に伝えられるかわかったものではないのだ。密告の誠実さが薄れてしまう。直訴するところに意味があった。

逐一、行綱の密告を聞いた清盛は、ぎろりと鋭い眼で密告

者をにらんだ。

「それで。うぬ自身はその謀議の席に幾たびつらなつた」

取調べる口調になった。

「はい、両三たび」

「ではその都度、暴挙の計画にうなずきをくり返したわけじやな」

この糾問もあらかじめ行綱は予測していた。すらすらと釈明が出来た。

「法皇のご下命とあれば、首を横に振るわけにはまいりませぬ」

「何だと。首謀者は院の御所だと申すのか」

「はい」

「それは難儀なことになったものじゃ」

さすがの清盛も暗い表情になる。

すべてが行綱の思惑どおりに運んでいるのだ。

「しかし昨夜はお徴行（しのび）がございませんでした」

「昨夜は、いらっしやらなかつたのか」

「そしてこれまで兵を動かすことの細目は一切討議されませんでした。行綱は昨夜初めてそれを聞かされたのでございませう」

「誰から？」

「成親大納言と西光どのから」

「西光か、彼奴……」

名を聞いただけで清盛は憎惡の眼を光らせた。

平治の乱で信西入道を裏切ったと吹聴しまわり、平氣で自分の悪口を言いまくる西光なのだ。

こんどの加賀白山権現の問題でも延暦寺の明雲座主を引きずりおろそうと画策したばかりか、後白河法皇の權威を楯に清盛に比叡山討伐まで下命させてきた西光だった。

院の絶体の寵臣であるため、さすがの清盛も手が出せぬのである。

「とすると、法皇は平家の悪口を叩くばかりで、これまで計畫実行のことは一切お洩らしにならなかつたと申すのだな」

「さようでございます」

行綱が平相国清盛に投げた餌、いやおのれの一身を救うための釣り糸とは、これだったのである。

「というと首謀者は大納言と西光法師であつて、院の御所はご関係がないというわけだ」

清盛は安堵した表情で、この陰謀計畫を性格付けした。いかに清盛でも法皇に向つて強權の発動は不可能であつた。

忠誠心のためではない。恐ろしいのである。

天皇家はこの国の国主、神秘なる神道の宗家であつた。その神なる人に危害を加えたあとの崇りの恐ろしさに清盛はお

びえるのだ。

「行綱、いまの話に寸分間違いはあるまいな」

「寸分もございませぬ」

近江中将成雅が鹿力谷の陰謀を六波羅へ訴えて出て、その使いの者が福原に駆けつけたのは同じ日の午後であった。

二人の証言がある。しかも後白河法皇を除外して事件を処理する心の用意も出来た。清盛は疾風神雷、兵を發して福原から六波羅まで駆けた。

上洛して最初に手をつけたのが法師西光の捕縛だった。

姉小路の旧信西邸へ平家の武者が乱入した。

三

西光は縛されたまま庭前にひきすえられた。かたわらに同じ姿で盲目の少年生仏も坐った。一昨夜、鹿力谷山荘に列座した理由で、二人が姉小路からしよっ引かれてきたのである。

清盛入道は大きな珠数を握り、僧衣姿であらわれた。

西光を睨みつけ、いきなり大喝した。

「やあ下郎奴、ほんらいの姿になってこの六波羅へ参りおったな」

「下郎とは何だ」

西光も負けてはいなかった。

「卑しき身が院の寵愛を得て思い上がり、天台座主ばかりか、この清盛をも滅ぼそうと企らみよって」

「下郎呼ばわりが聞いてあきれる。その昔、成親大納言のお父君、家成卿のお邸に入入りして、何とか仕官の口を得んものとうろつきまわった高平太とは、どこの誰のことだ」

「……………」

清盛にとつては耳ダレが出そうになる嫌な少年時代の話をはじめ。

「着る物としては柿色の装束一体のみ。恥ずかしきの余り、人前に出る折は扇で顔をかくし、骨の間より鼻を突き出し、口をきいたご仁は何処の誰だ。あれが平氏の鼻平太よ、とみんなは呼んだものだ。その鼻平太が今は成り上がって」

「やめい。誰ぞ、この乱心者の口を引き裂け」

清盛は並みいる家子郎党を叱咤するが、誰も西光の氣迫に恐れをなして動こうとはしない。

「あまつさえ自分の父は平忠盛ではない。若き日の四の宮（後白河法皇のこと）が手慰さみに生ませた落胤。四の宮は自分を土産にして女を忠盛に与えた、と自ら言いふらして、立身の業にもすがろうとした。哀れとも浅ましと……ワッ

「ハハ……」

「うぬがそこまで大口を叩くところを見ると、こんどの露頭に釈明や助命は一切しない腹だな」

「釈明や助命だと、何でそんな真似をする必要がある。このたびの一件は、天誅だからだ。多田の行綱如きが密訴したからとて終るものではない。天の涯て、地の底におちてもわれらはこの天誅の矛をおさめはしないのだ」

「ようし、望みどおり、うぬを地獄の底へ突き落してくれるわ」

清盛は庭先に降り立つと、僧衣の裾をひるがえし、西光の顔面を蹴り続けた。

「さあ斬れ。この首を」

斬れ口から血をふき出して。西光はわめいた。

「うぬの命令は受けぬ。此方の好きなきに、ゆっくり殺してやるわ。誰か、彼奴を引いてゆけ。石牢へ叩きこんでおけ」

西光が連れ去られると、生仏の番になった。

清盛は、後白河法皇の側近にいて、琵琶に卓抜なこの盲目の少年を、話では聞いていた。ただし会うのは今日が初めてだった。

「綾小路家の一門の出と聞いていたが」

さすがに西光法師へとは異なったやさしい調子だった。

「資時です」

「おぬしはしきりに平家を呪う琵琶歌を弾ずるそうだな」

「はい」

「一昨夜、鹿力谷でもそうだったというが、以前陋巷でもやっていたな。なぜだ、なぜそのように平家が憎いのか」

「人でなしばかりを作るからだす」

「人でなしばかり……」

「あなたは、この国のだいいじな砂金を宋に売り払って、しきりに唐銭を買いこみ、全国津々浦々へばらまいた。そして権力をお手におさめられた。銭は人間の心を奪います。美しい心をそこねます。みんな利に走って、人でなしになってしまった。それが憎い」

生仏は、ただ一片の感情だけで平家一門を憎悪しているのではなかった。また、西光への義理で陰謀の座につらなり、琵琶を弾じているのでもなかった。

ちゃんと論拠があったのである。

前にも触れたが、平家拾頭の裏には大陸の宋銭を大量に輸入し、これを主として西日本方面に流通させた通貨経済が巨大な支えになっていた。資本家商人という新しい階級が、平家の拾頭とともに誕生しつつあった。

例えばこの翌々年の治承三年七月。頭中将の久我通親は建



案し万物沽価（こか）の制定を急がせている。

—— 売人は高直（高値）を指し、買人は減直（低値）を好む。折申して裁断あり。これを中沽の法という。

要するに貨幣経済、商業取引の原則を規定したものである。

明法博士基広は、この法の注で、

—— 銭売買の事、近代唐土の銭を愛し、この朝においてもほしいままに売買す。

と実状を訴え、新興階級に批判的である。

ちなみに万物沽価の法の制定を急がせた久我通親は見事なオポチュニストで、以前は宣陽門院の院司という女院の執事程度の卑官だった。平氏一門が羽ぶりを利かせはじめると、これに取り入り、従来を捨てて平清盛の姪と一緒にになった。また平氏が没落するや後白河法皇に寝返り、二度目の妻を捨て、こんどは法皇の侍女で後鳥羽天皇の乳母だった高倉範子と結婚する。この範子の連れ子で後鳥羽天皇の後室に入れて、皇后だった関白兼実の娘宣秋門院と閨室できびしく争わせるのである。

平家の基盤である貨幣経済、その合法化を急がせた久我通親の忠勤ぶりが眼に見えるようである。

—— およそ我が国の衰弊ただこのことにあるか。
と九条兼実が日記「玉葉」で嘆いているように平家憎悪の

一面が此処にもあったのである。

「だたの琵琶師ではないな。立派に平氏の敵であるという理由を持つている。明朝、その首を斬り落してやるから、今宵はたっぷり念仏でもとなえておけ」

言い捨てて立ち去ろうとする清盛を、生仏は盲しいの眼で追った。

「一つだけお願いがございます。琵琶をひくことをお許し下さい」

「琵琶か」

「今宵が最後となりますゆえ」

「平氏を呪う今様はまかりならぬぞ」

「いえ、そんなものはやりませぬ」

「よろしい。ではこの庭前で思い残すことなく弾ずるがよい。此処なら人々の眠りのさまたげにもなるまい。それと、うぬならば逃亡もかなわんな」

清盛は、にやりと笑った。盲目の囚人ならば、というおのれの戯れ口が気に入ったのである。

六波羅屋敷の夜はふけてゆく。

広い内庭。その老松に形式的に縄でつながれた生仏は、次から次への琵琶歌を吟唱した。

夜が明けて、首を斬られるまでの間に、レバートリイのす

べてを歌いつくしてしまいたかった。

もちろん聞き手は一人もない。遠く屋敷口の方で、警固の者が規則的に巡邏している。

いや、一人いたのだ。

若い女人だった。

さっき平相国清盛が坐っていたあたりだ。屏風のかげにひそむように立って、じっと琵琶の音、生仏の声に聞き入っている。

おそらく通りかかって、ふと耳を傾け、そのまま立ち去れなくなったに違いない。

盲目の生仏には、そんな熱心な聞き手を確認することさえできない。

別な人影が近ずいた。

「小宰相ではないか」

「はい」

「そんなところで何をしている」

「しっ……中將さま、あの琵琶、あの声……」

夫を手で制して、ともに聞き入らせようとする。

なるほど胸のなかへ泌みてるような美声であった。夫の三位中将重衡も思わず妻小宰相のかたわらに坐りこんでしまった。

(つづく)

二 編集後記 二

○先月七日、エリザベス女王が来日された。日本では、国鉄ストのおまけまでつけて、国を挙げて歓迎申し上げた。イギリスの国語の下手な直訳を試みた。

神はわれらの慈愛深い女王を助けたまう。高貴なる女王よ、とわにいませ。

神は女王を助けたまう。彼女に勝利と栄光とを賜りたまえ。永くわれらを治めたまえ。

神、女王を救いたまう。

神の救いを歌いあげる国歌と、「君が代」とは相撲の千秋楽の歌だ」と思われている国歌とはいささかちがうようだ。これでは日本国民の上に「神の救い」も「仏の慈悲」もないわけである。

○三十年にも及んだベトナムとカンボジアの戦火もやっとおさまった。イデオロギーぬきで本当に喜ばしいことだ。同じ仏教国に住む私たちとしてその喜びは一そう大きい。

い。

それにつけても、サイゴンを中心とするベトナムの坊さんたちが、平和実現のために生命を賭して活躍したことは大したことだ。焼身自殺とまではいわぬが、日本の坊さんたちにあれだけの勇気があるだろうか。そういう私自身をふくめて深く自省したい。

○もう一つの喜びは、企業連統爆破の犯人が捕まったことだ。本誌本号にとりあげている「憎しみ」ではないが、彼らの企業に対する憎しみもさることながら、無関係の人々まで殺傷した彼らに対する国民の憎しみは大きい。憎しみはおのれにかえるものである。

爆弾製造をごまかすために、お経のカゼツトをかけていたという。とんだところにお経の功德があったものだ。

ベトナムの仏教と日本の仏教の在り方の方がいがいがマザマザと分るようだ。

日本女性隊エベレスト征服、万歳!!(T)

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 六月号

昭和五十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年五月二十五日 印刷
昭和五十年六月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

「浄土」教化トラクト

『お ぼ ん』

新書判・表紙共 12 頁

定価 一部 18 円 (200 部以上 16 円)

送料・実費



『五重相伝の手引』

A5 判 16 ページ 定価 85 円

(200 部以上 80 円・送料実費)



『和文浄土三部経』

附 法然上人撰「三部経釈」抄述

新書版 204 ページ 定価 200 円



好評『法然上人と浄土宗』

B6 判 96 頁 定価 180 円 (〒70 円)

(200 部以上 単価 160 円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番